

職員オススメ本 6月

「間借り鮭まさよ」 原 宏一／著 双葉社



棕太は妻の佑衣と二人でスペイン料理店を営んでいるが、経営が上手くいかず赤字が続いていた。ある日、雅代という女性が一か月だけ店を間借りさせて欲しいと声を掛けてくる。棕太は間借り料欲しさに許可をしたが、佑衣に聞かずに勝手に話を進めたことで喧嘩になり離婚寸前になってしまう。そんな中、雅代の鮭屋が開店し、鮭屋は日を追うごとに繁盛していく。棕太と佑衣は雅代が握る鮭を食べ、ほがらかな雅代や、雅代に胃袋も心も握られたと話す常連客達と接して行く内に考えが変わっていき…。

怒ったり説教したりせず、ただ寄り添ってくれる雅代がいることで、周囲の人たちの心を癒やしていく心温まる鮭小説です。

「お隣さんは小さな魔法使い」

有間 カオル／著 KADOKAWA



引きこもりの大学生・優一の隣に、訳あり風な外国人の母娘・パトリシアとシャルロットが引っ越してきたことから生活が一変する。自らを魔法使い見習いというシャルロット曰く、優一はシャルロットの使い魔として契約を結んでしまったらしい。

シャルロットが魔法使いになるため、銀のリボンを3つ見つけるという課題を手伝うことになり、おしゃまな彼女に振り回されながらも、人と人とのつながりの大切さを実感していく優一。

優しく温かい気持ちになれる一冊です。

「憂鬱探偵」 田丸 雅智／著 ワニブックス



ニシザキ探偵事務所は、西崎徹と助手の若菜で営んでいたが、まれに舞いこむ仕事でかろうじて食いつないでいた。

そんな西崎の元に舞いこんできた依頼は、「電車でよく足を踏まれて困っている」というものだった。断ろうとする西崎だったが、若菜の裏に何か秘密があるという言葉に満員電車に乗り込み検証することに。一週間の調査で足を踏んだ犯人を捕まえることが出来たが、その人は自分が足踏み師だと言うのだった。

解決できそうにない日頃の憂鬱な出来事の裏に隠された原因を暴く探偵の物語です。